

観光複合施設完結号！



いわむろのみらい新聞

第5号

2面～6面
観光複合施設プロジェクト
・教授と学生から
・各グループ作品紹介
7面
創生プロジェクト現状報告
8面
第1回シンポジウム開催



イワムロのタマリ
つくる・そだてる・たべる
岩室 SILO
みんなのいえ
岩室さんぽ
conta
straight corridor
複合施設設計画案

岩室に09年3月竣工予定の観光複合施設。既に基本設計が進められている中、それと同時に進行で、06年9月から建築学科3年『高橋スタジオ』のメンバーが観光複合施設チームとして3カ月間の設計課題に取り組んできました。

この課題は『いわむろのみらい』創生プロジェクトの一環として実際に建てられる建物を、それを実際に利用する地元の人々とコミュニケーションを図りながら設計していくという実践的なものでした。類似施設の調査から始まり、現地調査を経てグループ内での議論を重ね、岩室の方々へのプレゼンテーションと、普段味わうことの出来ない緊迫感溢れる体験を通し、様々な思いを抱きながら、学生達は日々邁進してきました。

(文・赤松慎太郎)

おつかれさまー！



この3カ月をふりかえって…

このプロジェクトに参加した高橋スタジオの学生たちが感想を書いてくれました。

岩室を訪れたことはたった1回しか
ないけれど、このときに自分の心が感じた
岩室の空気や土地のにおい、四方に広がる
自然に必ず後ろに見える山々を思い出し
この課題は、真向から取り組んでみた。
岩室は、私にとって建築の現実性も
身をもって体験できた大切な場所です。

熊坂 有華



渡れた。この課題は本当に大変だった。
ふつうは何度も岩室に行き、その土地を知り、そこから
設計を始める。しかし、今回は一度だけ行ったことの
ない岩室に岩室の拠点となる建物を設計するという
ことがもう非常に困難だった。学生さんと共に岩室を
活性化させていきたい」と言うのが本当のところは学生に
丸投げしている。本当に岩室を活性化させたいのなら、
もっと積極的かつ柔軟に岩室の人々の代表である
未来研究会が参加してくるべきではないだろうか。
もっとけんかになってもいいからつうじして良い意味で戦う
ことで、その結果、岩室の活性化になるのではないだろうか。

滝川 寛明

個人課題では得られない経験を沢山
しました。時には強烈に苦しいことも
あり、思い出すと胃が痛くなるような
こともありました。けれども、そんな苦
持ちを一変させてくれたのが岩室の
方たちの歌や踊りでした。誠心誠意
もてなしの心が伝わってきました。
次回また、観光複合施設が竣工
した時に岩室を訪れるのを楽しみにします。

山路 達彦

い、はい喧嘩とかしたけど、
グループのみんなが頑張ってく
れたから、僕はやり遂げれたと思う。
高橋スタジオの皆さん、どうもありがとう。

桜井 脩

私は、このグループでしかできない
設計ができて満足しています。

阿部 妙子

岩室という場所は少しいつでも
確実に変わり始めているように
感じます。

武田 京子

自分の作りたいものを
作ると同時に多くの人に好かれる
施設を作るという事を常に心がけました。
寿命を削って作った作品ですので、
岩室の方々には大切に育てて頂きたいと思います。

今までにない緊張感と大変さ、
やりがいを感じました。
今回このような大きなプロジェクトに
参加できたのは光栄ですが、
なによりもグループで力を合わせ
ひとつのものをまづくることを楽しめた
のが一番の成果だったと思います。

高山 美穂

この3ヶ月間を今改めて振り返ってみて、
最初の手探り状態で始まり、いろんな人との
対話を重ね、時には落ち込みたり、楽けて
仕方なかったり、そして最終的に一つの形と
して提案できたこと、かなり濃密な時間
を過ごせたと思います。

佐野 元春



自分の中の主観をいかに他者と共有できるか。
他者との話し合いが、自分のやりたいことを曲げる
ものではなく、むしろ自分の作品というのをより
明確にしていくのだと発見しました。
貴重な体験をさせてもらったことを感謝します。
鈴木慶一郎



岩室観光複合施設の課題に参加するとは、ギャップがあった。
全く違った環境をなやまして提案する側になれる側が
互いの生の声に触れた機会を持てたことに価値を
見だしていく、その答えが実物に集約される
気がするからだと思う。そして、その方向を今後、せいづ
でも見届けたい責任があるかもしれない。
山岸啓介



岩室に見い出したもの



建築学科教授
高橋晶子



昨年12月18日、岩室、ほてる大橋
にて観光複合施設の最終発表を
行いました。この課題に関わった
ほとんどの学生がこの岩室ツアー
に参加し、直接地元の関係者の皆
様の前で発表をして貴重な「学び」
の機会を得ました。年の瀬のお忙
しい中、御参加くださった皆様、ど
うもありがとうございます。

3年生7グループと、修士1
年生の小名君、合計8案の提案は、
外観と共に建物の空間の構成が
それぞれはつきりした特徴を持つ
ており、似通った案がありません。
こういう結果になったことは正直
良かったと思います。というのは
設計を詰めた結果、誰にも望まし
い案がひとつだけ残るというケー
スはまずありません。もち
ろん、車と人の動線が交錯するな
ど、不具合な案は早めに排除しま
す。しかし例えば足湯に注目する
と、ある案は訪れる人にとつての
確認のしやすさ、他の業務から営
業時間を独立させられる事、また
別の案では多宝山を望みながら楽
しめるというように、とらえ方
が異なり、条件を同時に満たす位
置は見つけにくいことが分りまし
た。また、来訪者が少ない時に施
設が閑散と見えないようにする工
夫は、棟で切ったり部屋になる部
分を壁やカーテンで閉めたりくび
れを作ったりする等、各案のデザ



イン特性に応じ提案されました。
もうひとつ良かったのは、場所
と人の関わり方のイメージを一般
の方にもわかりやすいように描い
た案が多かった事です。いろいろ
足湯、キッチン、ライブラリー、
靴を脱いでくつろぐ食事処など
は、「ああ、こういう感じか」と
想像しやすいものです。
通常施設の設計は、まず抽象
化された機能を基本計画でまと
め、その機能に対応する部屋を
決め、各室の規模と並べ方を整理
することが多く、いつまでも機能
が抽象的なままだと最後までイ
メージの具体性を欠いてしまうお
それもあります。今後ぜひ、基本
設計の検討作業にムサビ生案が
良いたたき台となり、実際に建つ
ものに、どこかでうまく活かされ
ることを祈っています。

ムサビ生の考える

『いわむろのみらい』最終案

建設が予定されている施設を取り上げた設計課題は、従来と比較すると、岩室温泉地域の歴史・風土・敷地周辺の環境を理解するのはもちろんのこと、そこに住まう住民の方々をより意識する課題となりました。

昨年10月に初めて岩室を訪れて以降、3カ月という短い期間ではありましたが、学生たちの積極的に岩室のこと知り、考えようとしていた姿勢が、施設をどのように活用するのかといったソフトの部分まで考えた作品から伺うことができます。

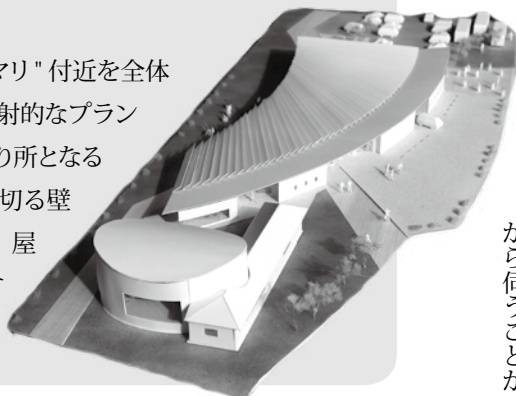
(文・小倉壮平)

A イワムロのタマリ



武田京子 / 山岸啓介 / 澤口和美

景観として山を望める"タマリ"付近を全体が感じられる場所とする放射的なプランとすることでこの施設の拠り所となるよう試みました。空間を仕切る壁の高さの操作や屋根の角度、屋根の表面をルーバー状にするという提案をしました。

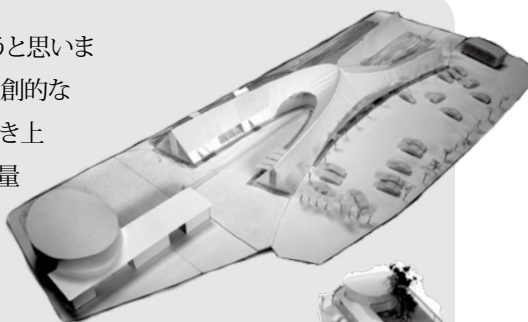


B つくる・そだてる・たべる



大坪拓摩 / 高嶋美穂子 / 小山西晴海

何よりもまず、観光施設として岩室の象徴になるものを作ろうと思いました。岩室に人を呼ぶ為に必要なものを突き詰めて考え、独創的な建物に魅力的なイベントと仕掛けを展開しました。地から浮き上がる外観を際立たせるため、床を平らにしました。また、光量調節と内部からはざかけの印象を持たせるため、梁を太くし、間隔を狭めました。内部の構成も元から見直し、座敷ではより畑との関係を強めることができました。

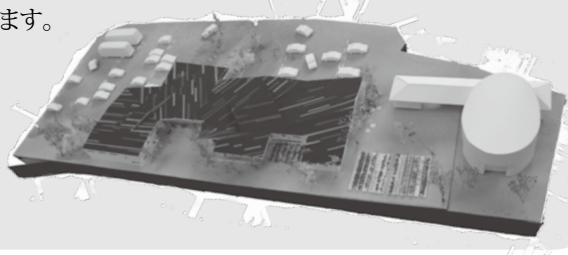


D みんなのいえ



山路達彦 / 黄明奕 / 鈴木慶一郎

観光メインの『土間』と、住民向けの『板の間・座敷』で、場を構成しました。訪れた人は靴を脱ぎ、少し親密な輪の中へと入っていきます。利用者が大きな家族となります。今回変更した事は、北側を前庭とし、可動床を前面にも展開させて収まりとパターンを調整し、最後に屋根を切妻が連続した形に一新しました。動線に沿い、求心性があり、積雪を北側に配す形態をとっています。



C 岩室SILO



櫻井脩 / 阿部しおり / 佐野元春

岩室をしよう！親しみやすいニックネームを考えました。素材感を出したり、色をつけたり、家具を配置したりしながら模型に具体的なイメージを落とし込み、その時の立面の見え方を重視しました。この施設を通じて色んな交流が生まれ、岩室のことをもっと知ってほしい、そういった願いをこめてニックネームを考えました。

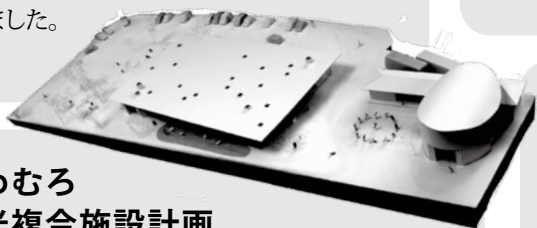


F conta



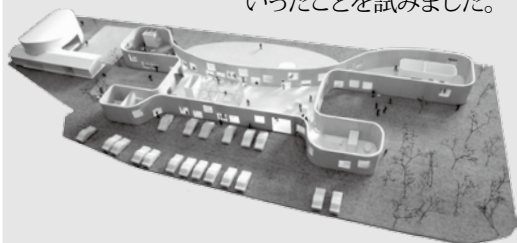
阿部妙子 / 滝川寛明 / 田辺愛

岩室のくらしの中にある山の起伏を敷地全体に設けることで、いわむろの中に観光客がとけこんでいくような場にしようと考えました。特に屋根と柱について深く考えました。室内の用途に合わせたトップライトや、林のような柱を設け、室内にいろいろな表情を作りました。



いわむろ 観光複合施設計画

私はこの敷地において、方角4方向に対して岩室地区を象徴とした性格を持った広場を優先的に配置しそれぞれに方向性を持たせ、そしてその広場によって切り取られた場所にひとつつながりの空間ボリュームを配置するといったことを試みました。



10月にこの岩室観光複合施設計画がスタートしてから約3ヶ月間、私はTA（ティーチングアシスタント）として関わってきました。今回の設計課題に対する私の関わり方は今までとは異なり、3年生や教授のフォローにまわりつつ、自分の設計も同時に行うという形でした。また、高橋教授とともに岩室で行われる設計打ち合わせにも同行させていただき、実際にプロジェクトが進行していく様を見る機会を得ることが出来ました。これは学部と社会の間のような立場で関われる機会であり、プログラムの組み立て方や対話の難しさ、また進行中のプロジェクトに対するリアリティなど多くのことを学ぶことができました。

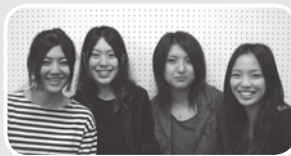
中でも一番強く感じたことは岩室らしさを説明するにあたって自分にとってのリアリティはどのあたりにあるのか、といった視点を設定することの重要性でした。それは常日頃から自分自身の中では考えていることであるものの、実際の社会の中では共有されるものかどうかと疑問を抱いていました。そういった中で今回の関わり方は改めて考えるべき事であり、学生だからこそこそでできる主張を、そこに絞るべきでもあると強く感じました。

今後この観光複合施設が基本設計へと移っていくなかで私たちがムサビ生が提案したことがどのように反映されていくのか、私たちはとても関心を持っています。それがより良い岩室の環境を造る建築になることを願っています。

最後に、4年前アートサ

イトに関わったときと変わらず迎え入れ、もてなしてくださった岩室の方々、ありがとうございました。

E 岩室さんぽ



熊坂有華 / 山口かすみ / 笠井悠紀子 / 國安萌夢

岩室の方にも観光客にとっても、歩きながら岩室の文化・伝統・人・自然に直接触れ合うことのできる、歩いて楽しい散歩道の一部になるような施設を計画しました。前回の発表以降、『岩室さんぽ』をより楽しめるように、植栽計画をしたり、床の仕上げや屋根のデザインなどの細かい部分を考え、最終調整をしていきました。

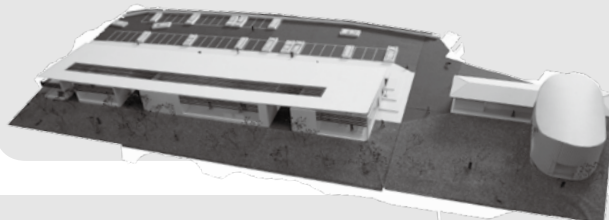


G straight corridor (直線の廊下)



岡村邦博 / 岡本草太

直線という要素を使って、もののつながり方、分け方、見え方などを操作できないかという事に着目し、形にしました。大きな変更点は無いが、前回より緑地の面積を広くとり伝承館まで伸ばして散歩道のような顔を持たせたこと、駐車場の中央を遮っていた通路を無くし駐車可能台数を増加させたことなどがあります。



ティーチングアシスタント
大学院1年 小名秀幸

…その最終発表会にて、インタビューを行いました!!



(有)像設計事務所
中村優晴氏

実践の立場から

今回、建築学科3年高橋スタ
ジオが授業課題として取り組
んだ観光複合施設の設計につい
て、現在実際に基本設計を進め
ている像設計事務所の中村氏に
お話を伺いました。



▲ 興味深そうに学生と話す中村さん

実務を行う立場として、自分

達はどうしても専門的になりす
ぎてしまい予定調和的な順序で
設計を進めてしまうので、今回
のムサビとの連携は学生の柔軟
な思考は参考になるとの期待か
らでした。また、学生の作品に

ついては現実的な構造や規模の
問題はあるにしろ、それらを克
服すれば十分に設計に活かせる
ものであり、今後実際に建てら
れる施設にもいくつか学生のア

イディアを取り入れていく方針

のようです。例えば駐車場を2
カ所に分けるということや街に
対しての動線の繋がり方、時間
期間によっての施設の使い分け
が可能な空間の分節の検討など
です。

施設の完成は数年後。学生の
描いた『いわむろのみらい』が
どのようなカタチで取り入れら
れるのか、今から楽しみです。

(文・赤松慎太郎)



新潟市営繕課
岸本秀也氏

学生へのアドバイス

この観光複合施設設計画に行
政の立場として携わっている
新潟市営繕課の岸本氏にも
3ヶ月間を振り返ってのお話
を伺いました。

「実施設計が進んでいく中

で武蔵野美術大学がこのように
関わっていくという事には不安
を感じる一方、どんなことを提
案してくるのだろうかという期
待も大きかったです。地元にい
る人間としては全く考えもしな
いようなことが提案されたの
で、とても刺激的でした。

普段の設計では、パターンと
して駐車場は一つと考えがちで
すが、時期などに合わせた二つ
の分かれた駐車場という案はす
ごく良いと思います。ただし、



▲ ほてる大橋での最終発表会の様子

季節的な事をもう少し考慮する

ともっと良くなったと思いま
す。一例では、この地域は冬、
北西からの強い風が吹いてくる
のですが、地元の人はそれをよ
く知っていて通常そちらに向け
て出入口は設定しません。この
様な点については改善が出来る
と思います。しかし、良い所は
必ず使わせてもらいます。待つ
ていて下さい」とおっしゃって
下さいました。

(文・伊井洋貴)



真剣に耳を傾ける研究会の方々



熱心に発表をする学生

第2回合同会議 in ムサビ!!

昨年12月22日、武蔵野美術大学にて、それぞれのプロジェクトが半年間取り組んできた活動の成果を、いわむろのみらい研究会の方々や本学教授・学生に発表する合同プレゼンテーションが行われました。

コアグループから



▲ (右) 画面の図を発表するコアグループの学生。

コンセプト発表!

コアグループによるコアコンセプトが発表されました。このコンセプトは、これからの岩室の町づくりを進める核になるものであり、今回は3案が提案されました。どれもコアグループの学生が3ヶ月をかけて岩室の歴史や文化について調べ、沢山の方々に取材をして作り上げたものです。

1つめは『宿場町』。もてなし

の心と「粋」を軸としてまちづくりを進める計画です。2つめは『新活沸美艶(しん・いわむろ)』と、当て字をし、この四つの文字から連想される活き活きとした文化や人を軸にするまちづくり。3つ目は『結びの里、岩室』。人を結ぶ帯を結ぶ(文化)、おにぎりを結ぶ(食)の二本柱に基づき進めていく案です。

今回のコンセプト発表では、これらの提案を受け、様々な意見交換がされました。それらを元にして今後この3案をさらに検討し1案にまとめ、2月6日・7日に、岩室にて最終案のプレゼンテーションが行われます。(文・高橋里佳)

マークロゴから

岩室の「顔」決まる!!

マークロゴ班の発表では、岩室の新しいロゴマーク・ロゴタイプと印章の提案のほかに、新たに設置されることとなった街灯の図案が決定しました。



▲ 街灯の模型を見せる担当者。芸妓の後ろ姿がデザインされている。

決定した図案は『岩室』の文字、だいろ(カタツムリ)、雁の飛翔姿、芸妓さんの4種類です。最終的なデザインは、これから詰めていく事になります。

新しい街灯は岩室のメインストリート飾る、つまりは岩室の『顔』ともなるものです。現在デザイン担当者がより良いものになしようと、期待をその背にひしひしと感じながら作業しています。

また当日の発表では、デザイン担当者とみらい研究会の方達との間で活発な意見交換が成されました。特に山のマークについての「岩室の山はあんなに険しくない」といったような岩室に関する具体的な指摘は、岩室での取材や調査がまだまだ足りない担当者にとって貴重な意見となりました。岩室のシンボルにするに相応しいものを作るべく、現地での緻密な取材を重ねていきたいと思っています。(文・櫻井奈穂)

公園チームから

「百年」を見据えて:



▲ 挨拶をする立花教授(左)。学生たちは真剣な面持ちです。

「百年の歴史を読み取り、新たな百年の系を創造する。」この中間発表会で公園設計チーム(建築学科立花ゼミ)が示した言葉です。古地図を紐解き、地形を読み歩いて見えてきた土地の変遷と展望を発表しました。

松岳山に着目し提案をした菅原康一さんの案「松茸山ーMatsutakeyama」。松茸山はかつて「まつだけやま」と呼ばれた時期がありました。年代によって様々な愛称で呼ばれ親しまれた松岳山の眺望を生かした場所に憩える場がありません。とに気づき、「下の堤」の池だけでなく、その周辺にみんなが憩える公園をつくりたいと話

してくれました。また、里山と村の緩衝地帯として、杉植林以前に存在した広葉樹林を雑木林として再生させたいと提案しました。

「50年前にあった蓮の池を再生させたい」と提案したのは「雁のおんがえし」案の戸井田雄さん。下の堤の池周辺まで公園の範囲を広げ、百年前の環境を再生することを目指しています。まず、蓮の池を復活させ、そして清水周辺の森を再生させて、その中に散策路をつくる試みです。

最後に全く異なる視点で提案したのは「〜てくてくさるく」岩室フィールドミュージアム」案の久留須和歌子さん。彼女はまち歩きの中から、岩室に潜むなびない面白いものや風景をたくさん見つけ出しました。それらを繋いだ散歩道やコースをつくってみてはどうでしょうという提案です。

百年という視野で過去と未来を見据え、公園設計チームは最終発表に向けて案を詰めています。きつと岩室らしき、里の暮らしと風土を礎にしたデザインが生まれるでしょう。(文・村井祥平)

第1回 シンポジウム 開催！



▲ 左から、小布施の市村市長、湯布院の米田さん、そして瓦井教授。

1月12日、武蔵野美術大学にて『いわむろのみらい』創生プロジェクト第2回シンポジウムが開催されました。岩室からは岩室温泉観光協会会長・岡崎昭さんと新潟市岩室支所産業観光課副主幹・久保田春一さんが招かれ、城西国際大学大学院ビジネスデザイン研究



▲ 岩室から— 岡崎さんと久保田さん

科教授で本学芸術文化学科非常勤務講師・瓦井秀和さん、そしてまちづくりの先例として、長野県小布施町長・市村良三さん、大分県湯布院観光総合事務所事務局長・米田誠司さんにお越し頂き、それぞれの地域で行われてきた活動や現状の課題、まちの特性の活か仕方などが紹介されました。

質の高い栗菓子と葛飾北斎美術館等によって住む人が楽しめる街作りを目指す小布施。今では誰もが知っている湯布院という街は実は40年程前から本格的な街作りが始まった事。自然と田畑を守りながら進めてい



▲ 大学の会場の様子。

るまちづくりについて等、とても興味深い話をして頂きました。会場には本学の大勢の先生方や学生が集まり、真剣に耳を傾けてメモを取る姿が見られました。

また最後には、学生達から沢山の質問が寄せられ、シンポジウム終了後にも個人的に質問をしに行く学生が何人もいました。

このシンポジウムが、今後のいわむろの活性化に、良い勉強として大いに役立っていくことが期待されます。

(文・高橋里佳)

※『ムサビの風景』はお休みです。

編集後記

今回編集長を務めさせて頂いた小林です。ニュースレターの編集は初めての体験だったので、一体何からどう始めたら良いのかと最初は色々考えていましたが、「自分の好きなようにしなよ」と言われ、変に励まされませんでした。予定表に沿って作業していくことや、文章の見直しなど、苦手だなあと

いく事と、生徒の感想や、各グループ作品などといった企画を、賑やかな雰囲気

で伝えられるように心掛けて作っていました。

去年の9月から3カ月の間、忙しく制作に励んできた建築チームの先生方と皆さんに「おつかれさま」という意味も込めて、この号を届けたいと思っています。

これからも、学生たちがどんな思いをもって、このプロジェクトに取り組んでいるのかを、この新聞でより多くの岩室の皆さんに伝えていきたいです。

(第5号編集担当・小林つづら)



■発行

「いわむろのみらい」創生プロジェクト
いわむろのみらい新聞編集部
第5号編集担当 小林つづら

■連絡先

武蔵野美術大学／研究支援センター
〒187-8565 東京都小平市小川町1-736
Tel & Fax 042-342-7263

■プロジェクトホームページ

<http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/>

©「いわむろのみらい」創生プロジェクト 2007